

◆ 巻頭言

孤立する子どもを前に、 私にできることは何かと問う

坂上 香

薬物依存の親をもつ子どもや、DV家庭で育った子どもたちを対象にした表現プロジェクト「メディア4 Youth」(メディア・フォー・ユース)を始めて5年が経つ。自宅で自前の機材を使って細々と始めたのだったが、今では大学の施設で、ダンサーや写真家、アートマネジャーなど、さまざまな表現者や学生ボランティアの力を借りて、子どもの創造力を引き出すための多角的な支援ができるまでになった。

昨夏はキャンプで上映会、秋と冬には写真展「おどるカメラ、旅するカメラ」を開催し、子どもたちの作品を多くの人に見てもらった。会場では、子どもたちを一人のアーティストとして紹介する。照れながらもイキイキと受け答えをする姿は、数ヵ月前までオドオドしていた子どもたちにかかわってきた大人たちをホロリとさせる。こうした活動を通してメディアに関心をもち、自ら大学進学を選択する子どもも出てきた。そんな子どもたちの変化に感化され、親が変わったりもする。しかし、それですべての問題が解決するわけではないことも認識している。

私は長年、暴力の加害者や被害者をめぐる映像制作に携わってきた。その中で、日本では両者の子どもに対する社会的支援が欠如していることが気になっていた。映像作家としてだけでなく、一市民として私にできることは何なのだろうか。この問いが、社会とのつながりを断ち切られた子どもたちとの表現活動へと私を誘った。

この数年間、米国、豪州、英国で、受刑者やその子どもを対象にした数々のアートプログラムを見てきた。中でも参考にしたいと思ったのは、社会的孤立を強いられてきた子どもたちが、表現活動を通して自分の声を獲得し、社会とつながり直していく姿だった。そこでは、さまざまな分野の大人が得意なことを提供し、緩やかに連携していた。

事件が報道されると世間は騒ぐ。親、子ども、学校、関係諸機関を断罪する。事前に予防できなかったのかと責める。けれど事態は単純ではない。日頃から、一人ひとりが自分にできることは何かを考え、かわっていくことからしか始まらないのではないだろうか。



PROFILE

坂上 香
(さかがみ かおり)

ドキュメンタリー映画監督・津田塾大学准教授。NPO out of frame 代表 (outofframe.org)、津田塾大学ソーシャル・メディア・センター副センター長 (<http://edu.tsuda.ac.jp/cmcc1>) として、ニーズあるコミュニティ(何らかの社会的支援を必要とする人々)との協働表現プロジェクト展開中。映画「ライフアーズ 終身刑を超えて」(2004)は複数の賞を受賞。